



能登やさしいこめづくり情報

令和2年6月
能登米振興協議会
能登米生産者協議会
能登南部営農推進協議会
J A 能登わかば

早生穂肥編

穂肥の適期・適量施用で、収量・品質を確保!!

1 生育概況と当面の管理

- ・ 本年は、5月の田植え以降、気温が平年より高く推移しており、(七尾市:平均気温18.8℃(平年+1.2℃))、初期生育は順調であるものの、分けつの発生は旺盛で、現在の茎数は平年より多い状況です。
 - ・ 葉数の展開から推測される生育の遅速は、平年と比べて早生品種で1日遅く、コシヒカリで1日早い状況となっています。
 - ・ 早生品種では6月30日頃まで、コシヒカリでは7月10日頃まで、ひやくまん穀では7月20日頃まで、引き続き中干しを継続し、稲体の健全化を図りましょう。
 - ・ 今後は、①「適切な穂肥の施用」、②「出穂まで1か月間の飽水管理」、③「出穂後の2回防除の徹底」に努めて下さい。
- 【参考】生育調査結果(6月23日現在)

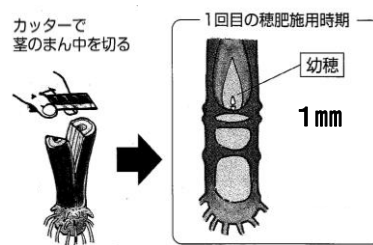
品 種	草 丈 (cm)			㎡当たり茎数(本/㎡)			株当たり茎数(本/株)			葉 齢 (枚)		
	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%
コシヒカリ	53.2	107	117	548	93	109	31.5	94	123	10.0	98	101
ゆめみづほ	51.3	111	121	473	84	93	27.0	84	93	10.3	96	99
ハナエチゼン	51.7	119	120	500	105	100	28.0	105	111	11.2	105	109
ひやくまん穀	48.6	121	144	449	87	149	24.3	87	153	10.1	107	126

2 出穂予測と穂肥時期の目安 [ポイント① 適切な穂肥の施用]

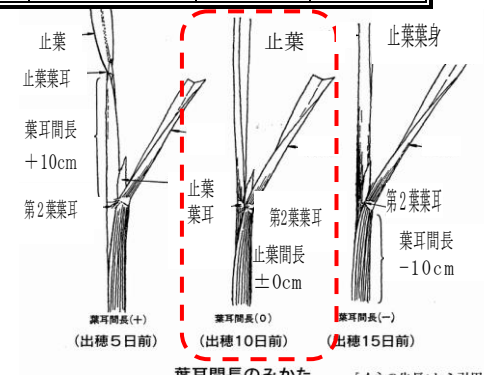
・ 出穂期は、「ゆめみづほ」は7月21日頃、「ハナエチゼン」は7月17日頃で、**平年よりも3日早い**予想です(6月23日時点)。

- ・ 分施肥系では、生育過剰なほ場や葉色が濃いほ場では、1回目の穂肥時期は遅らせず、量のみを減らして施用して下さい。
- ・ 1回目穂肥が施用出来なかった場合でも、**2回目穂肥は必ず施用して下さい**(稲体の消耗を防ぎ登熟向上を図る)。

(<注意>追肥を1回目の時期の1回のみで終わらせないこと)



(図)1回目の穂肥施用時期



(図)2回目の穂肥施用時期 (左から出穂5日前、出穂10日前、出穂15日前)

品 種 名	肥料名	回数	時期(出穂前日数)	施用量	備 考
ハナエチゼン	BB 秋ゆたか	1回目	6月24日頃(23日前)	15~20kg/10a	1回目の穂肥施用基準は、幼穂長1mm(上図参照)、葉色板4.0 2回目の穂肥施用時期は、葉耳間長±0cm(上図参照)
		2回目	7月7日頃(10日前)	20kg/10a	
	BBLP 秋ゆたか	1回のみ	6月23日頃(25日前)	35~40kg/10a	<注意> ・ 葉色が濃い場合(葉色板4.0以上)は施用量を3割程度減じて施用して下さい。 ・ 地力がなく秋落ちしやすいほ場は、BBLP 秋ゆたかを施用して下さい。
ゆめみづほ	BB 秋ゆたか	1回目	6月30日頃(23日前)	15kg/10a	
		2回目	7月12日頃(10日前)	20kg/10a	
	BBLP 秋ゆたか	1回のみ	6月28日頃(25日前)	30~35kg/10a	

暑さに負けない! 「ゆめみづほ」登熟向上対策!!

★基肥一発肥料での追加穂肥の施用★

・ 基肥一発肥料では、基本的には追肥の必要はありませんが、①近年の登熟期の高温による栄養凋落の防止 と ②収量の向上のため、以下を目安に上乘せ追肥に取り組んでみましょう。

品 種 名	追加穂肥の判断		追加穂肥の施用		
	判断時期(出穂前日数)	判断基準(葉色)	施用時期(出穂前日数)	肥料名	施用量
ゆめみづほ	7月7日頃(15日前) (幼穂長4cm・葉耳間長-10cm)	葉色板5.0未満 (葉色が濃い場合は施用しない)	7月12日頃(10日前) (葉耳間長±0cm)	BB 秋ゆたか	7~10kg/10a

3 中干し終了後の水管理 [ポイント② 出穂まで1か月間の飽水管理]

・ 登熟期間の水稻の活力を維持するためには根を健全に保つことが重要です。そのためには、適期の中干しに加え、中干し以降の水管理が大きく影響します。きめ細やかな水管理により登熟を向上させ、未熟粒の発生を防ぎましょう。

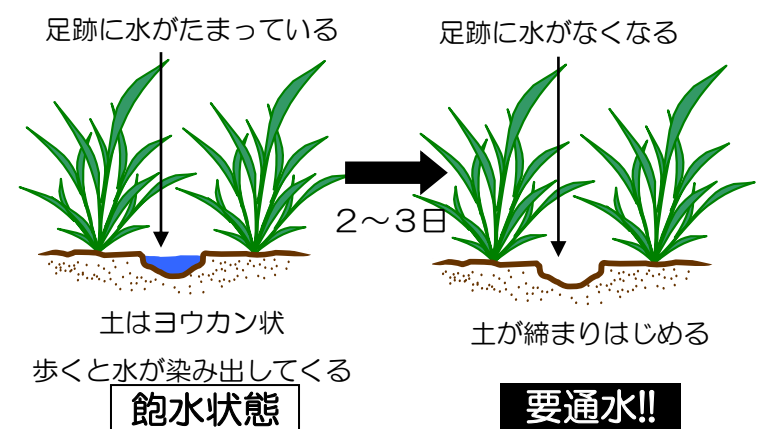
飽水管理の徹底

幼穂形成期(早生品種6月30日、コシヒカリ7月10日、ひやくまん穀7月20日)以降は、新しい根の発生が少なくなるため、中干し終了後は2~3日間隔を目安に通水し、飽水状態(右図)を保ち、根の活力維持を図りましょう。

- 1 通水は出来るだけ朝方か夕方に行いましょう(水田内の温度を上げない)。
- 2 向こう1か月の予報によると北陸地方は平年に比べ曇りや雨の日が少ないとされていますので、集落や地域ぐるみで、計画的な水利用に努めましょう。

【飽水管理】とは・・・

ほ場表面に水はないが、足を踏み入ると水が染み出てくるような水分状態を維持する水管理のことです。



飽水状態

要通水!!

4 斑点米の発生防止対策【ポイント③ 出穂後の2回防除の徹底】

・斑点米カメムシの生息密度を下げるため、7月10日頃までに地域・集落ぐるみで畦畔や農道等の一斉仕上げ除草を実施しましょう。

<一斉草刈り強化週間は7月4日(土)～7月10日(金)>

・7月中旬以降の除草は、斑点米カメムシを本田に追い込むこととなるので、基本的には行わないでください。

やむを得ず、除草する場合は、基幹防除の直前に行ってください。

・基幹防除では、出穂期の7日後(穂揃期)と、14日後(傾穂期)の2回防除が斑点米の被害防止に重要なので、必ず実施しましょう。

【出穂期】とは・・・

ほ場全体の40～50%が出穂した時期をいいます。

<斑点米カメムシ類>

<p>【歩行性】</p> <p>トゲシラホシカメムシ コバネヒョウタン ナガカメムシ</p>  <p>体長5～7mm 体長5～6mm</p>	<p>【飛翔性】</p> <p>アカヒゲホソミドリ カスミカメ ホソハリカメムシ</p>  <p>体長5～6mm 体長9～11mm</p>	<p>アカスジ カスミカメ クモヘリカメムシ</p>  <p>体長5～6mm 体長15～17mm</p>
---	--	---

(1) 基幹防除

①粉剤体系

昨年、発生量が多かったことに加え、暖冬の影響で越冬率が高まり、今後急激な増加が予想されます。

粉剤防除では防除効果を高めるため、風の無い時間帯を見計らい、散布後3～4時間は降雨がない日に散布して下さい。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	トレバリダビーム粉剤 DL 2成分	3～4kg	7月15～20日頃	出穂直前防除
2回目	いもち病、カメムシ類	ラブサイドキラップ粉剤 DL 2成分	3～4kg	7月24～29日頃	出穂7日後頃(穂揃期)
3回目	カメムシ類	キラップ粉剤 DL 1成分	3～4kg	7月31日～8月5日頃	出穂14日後頃(傾穂期)

○成分 は、化学合成農薬成分の数です。

②粒剤体系

粒剤防除は一人で散布できることや、粉剤のような飛散(ドリフト)が少ないため、市街地等でも散布が可能なメリットがあります。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	イモチエースキラップ粒剤 2成分	3kg	7月6～11日頃	出穂10～12日前頃(散布後4～5日の湛水)
2回目	カメムシ類	キラップ粒剤 1成分	3kg	7月24～29日頃	出穂7日後頃(穂揃期)(散布後4～5日の湛水)

③液剤体系

液剤防除は散布に労力はかかりますが、安価ため、コストを抑えることができます。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	ビームエイトレボンゾル 2成分 + バリダシン液剤5 0成分	650倍・100～150L 1000倍・60～150L	7月15～20日頃	出穂直前防除
2回目	カメムシ類	キラップフロアブル 1成分	1000～2000倍 ・60～200L	7月24～29日頃	出穂7～10日後(穂揃期)

(2) 随時防除の実施

病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	摘要
稲こうじ病 墨黒穂病	Zボルドー粉剤 DL 0成分	3～4kg	【予防剤】常発地では出穂10～14日前に散布 (出穂10日前以降は薬害の恐れがあるので散布しない)

【農薬の適正な使用について】ラベルに記述してある使用方法以外の使い方をすると法律(農薬取締法)で罰せられます。消費者に安心して安全な能登のお米を食べていただく気持ちをもって、農薬は正しく使用して下さい。